〈モデルプラン1〉

教科における海洋教育

1. 単元名

「わたしの町 はっけん」(第2学年 生活科)

2. 単元の目標

自分たちの住む町の「すてき」を探す活動を通して,次の事項を身に付ける。

自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かること。 【知識・技能の基礎】	地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考え,表現すること。 【思考力・判断力・表現力等の基礎】	海の近くにある自分たちの町に親しみや愛着をもち,自然を大切にしたり安全に気を付けて生活したりしようとすること。 【学びに向かう力,人間性等】

3. 単元の概要

〈1〉単元の構想

本単元は,小学校学習指導要領(平成29年告示)の生活科の内容(3)を受けて設定したものである。ここでは,地域に関わる活動を通して,地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ,自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり,それらに親しみや愛着をもち,適切に接したり安全に生活したりできるようにすることを目指している。

日本は島国であり,海に面する地域が数多くある。また,海につながる川が地域を流れているなど,直接海に面していなくとも,海とのつながりの中で生活する地域を含めると,その数はさらに多くなるだろう。

そうした地域で生きる児童にとって,自分たちの生活する地域に海(または川)が存在し,それらは自分たちの生活と深く関わっていることを認識することは,とても重要なことである。東日本大震災では,海沿いに住む人々の大切な命が数多く奪われた。しかし,日頃から海に面していることを認識し,そこに潜む危険に備え訓練を重ねていた児童が,自分たちの決断で命を守り抜いたという例も確かにあった。自分たちの生活に「海」が深く関わっていることを認識するという活動を,小学校の早い段階で学習として経験することにより,その経験が他の学習と結びつき,自分の生活に生かされ「生きて働く力」となるだろう。

そこで,本単元では,実際に海(または川)と触れ合う活動,海に関わる職業や商店の人々と触れ合う活動,振り返る活動を通して,自分たちの生活と海との関わりの気付きを深めるとともに,活動にかかる様々な資質・能力を育成し,自立への基礎を養うことを目指す。

〈2〉海洋教育としての視点

生命	海や干潟に棲む多種多様な生き物やそれらに関わる職業や人々の存在
安全	海辺での安全な過ごし方

〈3〉教科等との関連

教科	学年	学習内容
生活	2	● 動植物の飼育・栽培,生活や出来事の伝え合い ● わたしの町 はっけん(本事例)
国語	1・2	● 身近な出来事や経験したことなどから話題や題材を決め,話したり,聞いたり,書いたりする活動 ● 図鑑や科学的なことについて書いた本を読む活動
社会	3	● 身近な地域や市区町村の様子　● 地域に見られる生産や販売の仕事 ● 市の様子の移り変わり
	4	● 自然災害から人々を守る活動　● 県内の特色ある地域の様子
	5	● 我が国の農業や水産業における食料生産　● 我が国の国土の自然環境と国民生活の関わり
	6	● 我が国の政治の働き
理科	3	● 身の回りの生物
	4	● 雨水の行方
	5	● 流れる水の働きと土地の変化
	6	● 生物と環境
道徳	全学年	● 郷土を愛する態度　● 自然愛護
総合	3～6	● 身近な自然環境とそこに起きている環境問題　● 防災のための安全な町づくりとその取組　等
特別活動	全学年	● 心身ともに健康で安全な生活態度の形成

4. 単元指導計画(全24時間)

	学習内容・活動	指導上の留意点…● 海洋教育・教科等との関連…▲ 評価…◆
第1次 町のすてき はっけん	**町のすてきを教え合おう(2時間)** ● 町にあるすてきな場所や人,ものを紹介し合う。 **町のすてきに会いに行こう(2時間)** ● 前時で紹介し合った場所や人,ものを実際に確かめたり,新たなすてきな場所等を発見したりするため,町探検に行く。 **もっとはっけん! 町のすてき(3時間)** ● 町探検を行い,新たに見つけた町のすてきな場所や人,ものについて話し合う。	● ここではまだ「海」に焦点化する必要はなく,児童の生活経験から想起される様々なものを紹介し合う。 ● 探検のルート上に「海(または川)」や「干潟」を設定することで,対象物との自然な出会いを設定する。 ▲ 実際に触れる活動を短時間設定し,「もっと触れたい,知りたい」という思いをもつことができるようにする。 ● 写真などで海や干潟の思い出を想起できるようにする。 ◆ 自分たちの住む町には様々な場所があることに気付いている。【知識・技能】

	学習内容・活動	指導上の留意点…● 海洋教育・教科等との関連…▲ 評 価…◆
第2次 町のすてきを あつめよう	**もっと知りたい 町のすてき（10時間）** ● 自分たちの町にある「海」や「干潟」についてもっとくわしく知るため，2回目の町探検の計画を立てて，実施する。 ● さらにくわしく知るため，海や干潟に関わる仕事をしている人やお店の人にインタビューをするため，3回目の町探検の計画を立てて，実施する。	● 2回目の町探検では，海や干潟に十分に触れる時間を確保し，個々の気付きを発見したり，思いを深めたりできるようにする。 ● 3回目の町探検では，「人」に焦点を当て，言葉による情報収集や，人々の思いを知る活動を設定する。 ▲ 多様な生物との触れ合い，海辺での過ごし方の注意点の理解，海に関わる人々との触れ合いを通して，海への親しみと理解を深めることができるようにする。 ◆ 自分たちの生活は，身近な海やそれに関わる人々の働きと関わっていることに気付いている。【知識・技能】 ◆ 身近な海や海に関わって働く人々，生活する人々について考え，表現している。【思考・判断・表現】
第3次 町のすてきを 教えよう	**「町のすてき発表会」を開こう（7時間）** ● 3回の町探検で調べた町のすてきについて，グループごとにポスターにまとめて発表し合う。 ● 町探検を振り返り，思ったことや考えたこと，これからの学習についてまとめる。	● 「生き物」「仕事」「人々の思い」など，様々な視点の気付きを共有できるよう意図的に支援する。 ● 学級全員で振り返りを共有する中で，「海」が自分たちの生活に密接に関わっているという認識が深められるようにする。 ◆ 自分たちの住む町の「海」に愛着や親しみをもち，安全に生活しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

5. 学習の展開（本時3・4／24）

〈1〉目 標

町探検を通して，自分たちの住む町には「海」や「干潟」があることに気付くことができる。【知識・技能】

〈2〉展 開

段 階	学習内容・活動　予想される児童の様子…●	留意点…●　海洋教育・教科等との関連…▲　評 価…◆
導入	**前時の活動を振り返る。** ● 自分たちの住む町にある すてきな場所や人，ものについて 紹介し合った内容を思い出す。 **本時のめあてを知る。** **めあて**：みんながすんでいる町のすてきをたしかめ，あたらしいすてきをさがしに，町たんけんに出かけよう。	● 前時までの話し合いの内容を 模造紙等に整理しておき，内容を想起できるようにする。
展開	**町探検に行く。** ● 海がこんなに近くにあったんだね。 ● 海にはどんな生き物がいるのかな。 ● 海に入って遊びたいな。 ● あの船に乗っている人は 何をしているのかな。 ● 干潟って初めて見たけど，いろんな生き物がいるんだね。 触ってみたいな。	● 町探検のルート上に，「海」や「干潟」との自然な出会いを設定することで，それらを認識するとともに，関心を高めることができるようにする。 ▲「海」や「干潟」での触れ合いでは，簡単な注意点だけを指導し，次回の探検でより深く学ぶようにする。 ● 場所や触れ合いの様子を写真や動画で記録し，次時の振り返りに活用できるようにする。
まとめ	**今日の活動を振り返り，次時の学習を考える。** ● 町探検で新たな発見があったことを確認し，次時はそれらを発表し合うことを計画する。	● 本時のめあてを想起し，町についての新たな発見があったことを振り返り，次時の学習への関心を高めることができるようにする。 ◆ 町探検を通して，自分たちの住む町には「海」や「干潟」があることに気付いている。【知識・技能】

〈3〉学習を通して期待される児童の変容

身近な海への親しみの深まり,愛着の形成

身近に海や干潟があっても生活との結びつきが弱いため,児童と海や干潟との関わりが薄い現状がある。徒歩で訪れられることや,そこに生き物がいるという認識さえないことが考えられる。

生活科の学習では体験を重視しており,自分たちの足でその場所まで行ってみることが大切である。実際に行くことで,海の近さ,海の空気・風・匂い・雰囲気などを感じ,そこにすむ生き物や暮らす人々の存在を知り,自分たちもそうした海のそばで暮らしていること等に気付く。そうした体験から親しみが深まり,「身近な海」としての愛着が形成される。

干潟でそれぞれの気付きを得る

<深瀬 里美>

6. 本モデルのポイント

指導した教師からは「これだけ近いところに海があることを実感し,多様な生物が暮らしていることに驚いた。教師自身が海を自分の目で見て,知ることがまず何より大切だと思った」等の感想が寄せられた。物理的に近い海を,心理的にも近い海へとしていくには,まずは教師が体験し,それをもとに児童への指導を考えることが大切である。

生活科の目標には「活動や体験の過程において,自分自身,身近な人々,社会及び自然の特徴やよさ,それらの関わり等に気付くとともに,生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする」とある。学習指導要領解説によると,その気付きは,「対象に対する一人一人の認識であり,児童の主体的な活動によって生まれるものである。そこには知的な側面だけではなく,情意的な側面も含まれる」と定義されている。海での様々な体験により,児童は諸感覚を通した多くの気付きを得る。それが,「無自覚だった気付きが自覚されたり,一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられたり,対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすること」という気付きの質の高まりにつながることが大いに期待できる。このように生活科としての深い学びを追求していくことが,その後の海洋教育の展開の基礎となる。

指導を考える際には,安全面への配慮が欠かせない。海では,冷たい水に浸かることによる心臓への負担,潮風や日射などによる体調不良,岩や構造物による怪我,生物による毒,高波や地震後の津波等,様々な危険が想定される。実地踏査を通し,授業を想定した防災に関する教師の学びが,生活科としての「生活上必要な習慣や技能を身に付ける」学習の質を高め,防災教育へとつながっていく。

以上のように,これらの生活科の深い学びを教師自身が追求していくことが,児童の深い学びへとつながり,海洋教育を深めることにつながっていく。

<川上 真哉>